

河田和子著『戦時下の文学と〈日本的なもの〉—横
光利一と保田與重郎—』

中原, 豊
中原中也記念館

<https://doi.org/10.15017/17832>

出版情報 : 九大日文. 14, pp.93-96, 2009-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

河田和子著

『戦時下の文学と〈日本的なもの〉——横光利一と保田與重郎——』

NAKAHARA
Yuko
中原 豊

昭和初年代から一〇年代の文学の研究に取り組む人間にとつて、決して避けて通れないのがいわゆる日本回帰の問題である。作家やジャンルを問わず、どこかに必ずその問題に通じる道筋が潜んでいる。その道を進んでいくと、たいていは濃い霧の中を彷徨うことになる。絡みあった糸をほぐしながら辿っていくと、その端が自分の体内に消えていつてしまいうような、奇妙な不安感が拭い去れない。

著者は長年こうした問題に正面から取り組み続けてきた。本書はその成果を纏めた学位論文に基づく労作である。その全体像を概観するために、以下に目次を挙げる。

序章 〈日本的なもの〉という問題機制

第一部 横光利一の科学主義と近代の超克

第一章 近代科学の文学的受容と〈機械〉の新感覺

第二章 『紋章』における「自由」の精神と日本的「自然」

第三章 『旅愁』における〈みそぎの精神〉と古神道

第四章 〈文学的象徴〉としての数学と『旅愁』

第五章 科学主義の超克と古神道

第二部 保田與重郎の文明開化批判

第六章 「日本の橋」とフツサールの現象学

第七章 日本の風景観と文明開化批判

第八章 言霊論と「神人一如」

第九章 国学の再建による《文芸復興》と国民文化運動

終章 横光利一と保田與重郎における近代主義批判

昭和初年・一〇年代の〈日本的なもの〉に関する主要文献一覧

序章において、著者は、戦後的なニューアンスをもつ〈日本回帰〉というチームを避け、昭和初年代から一〇年代の知識人たちを支配した日本主義的思潮を〈日本的なもの〉と呼び、昭和一〇年前後の〈文芸復興〉や昭和一七年の「文学界」のシンポジウムをはじめとする〈近代の超克〉論議と連繫したものと捉える問題機制を提示している。考察の対象として選ばれたのは横光利一と保田與重郎である。西洋文明を日本化して〈日本的なもの〉＝新しい伝統を創出しようとした横光と、日本の古典や国学に純化された〈原日本的なもの〉＝原理的なものを求めた保田という対置は、本書のテーマをより立体的かつ複眼的に追究していくために設定された枠組みであるが、読み進めるに従ってその有効性が明らかになっていく。

第一部では、四章にわたって横光の小説「鳥」『紋章』『旅愁』が検討されていく。「デアテルミイ」や飛行機といった近代科学が生みだした（機械）によって登場人物の心理や感覚が支配されるといふ内容をもつ「鳥」には、新感覚派時代の横光の近代科学に対する樂觀的な信頼が現れているが、後の「機械」ではむしろ（機械）に対する（私）の脅威心や猜疑心、自己疎外の状況が語られている。こうした反転を踏まえた上で、『紋章』では主要な二人の登場人物にスポットがあてられる。発明家雁金は、家系・祖先から国家にいたるまでの共同体に尽くす無私の精神と、理性を排して直覚にもとづく行動とが結びついた日本精神の体現者である。一方の久内は、当時の知識人が盛んに議論していた、資本主義的な所有の觀念から離れた意識の自由の問題に呼応させるかたちで造形されている。ドン・キホーテとサンチョ・パンサにも目されるこの両者を通じて、実践的な「自由」の精神と日本的な「自然」意識との間で揺れ動く知識人の自意識そのものが浮き彫りされているのである。『旅愁』では、西洋的知性を信奉する科学主義者である久慈と心情的な日本主義者である矢代の論争を通じて、西洋における近代主義の行き詰まりを受けて、西洋近代の文化を急速に移入した末に行き詰まりを見せている日本の近代の問題と格闘する知識人の姿を浮き彫りにしている。第三篇以降ではさらに進んで、横光が影響を受けた古神道の（みそぎの精神）やラファエル・ヘルの夢を反映させ、科学主義やキリスト教とどう折れ合うかという矢代の苦悩の中に、移入した外国の文化を吸収同化して、

いかに新しい日本の伝統を創出するかという問題を呈示しているのである。著者はこうした思索の歩みについて、〈近代の超克〉論者であった三木清らがポストモダンとしての日本の近代の可能性を追究したことと比較して、科学的精神の影響の大きさや心理の問題を重視した点に、新感覚派の旗手として出発して文学者として時代の問題に誠実に立ち向かい続けた横光の特徴を見出している。

「保田與重郎の文明開化批判」と題された第二部では、保田の「日本の橋」および風景論、言霊論、古典論が検討されていく。これまで看過されてきた改稿の意味の考察を通して、「日本の橋」において、保田が複数の人々の主観によって歴史的に結晶し生成されたものとしての、古典文芸の橋、名所や伝説の歌枕の橋に関心を寄せるのは、その根底に自然を客観的な対象物としてではなく主観的現象として捉えようとするフツサールの現象学の立場に立っていたことを指摘する。こうして京都学派を通じて受けた西洋的知性の影響から出発しながら、保田はシンポジウム「近代の超克」参加者たちとは異なる独自の道を歩んでいく。風景論においては、線的遠近法に基づいて主体と客体の間に根源的な区別を設ける西洋的な風景の觀念を否定し、日本の古典テクストにおいて先人たちの眼を通して歴史的に形成されてきた歌枕を「概念的な風土として統一されぬまへの風景」として評価した。言霊論においては、富士谷御杖の科学的態度への依拠から本居宣長の合理的解釈を否定しようとする態度への依拠へと転じ、鹿持雅澄『万葉集古義』における「神

人一如」すなわち創造の神と皇神を同一視する世界観に創造性の回復という同時代的な意義を見出ししている。また、古典論においては、〈文芸復興〉と結びつけて江戸時代の国学の再建を主張しているが、そこに西洋近代の進歩史観で日本文化、古典文芸を捉える文明開化の論理に対する、〈自然〉の〈生成の理〉に基づく〈近代の終焉〉の思想があった。そのいずれにおいても、シンポジウム「近代の超克」の論議や当時の日本主義的思想および近代天皇制の天皇観とは一線を画する独自性をもっていたという指摘は重要である。

終章は全体の整理と問題提起である。横光と保田のそれぞれ営みは、移入した西洋思想・文化を日本流に組み替えていくか、それを否定して別の原理を打ち立てるかという、昭和一〇年代における〈日本的なもの〉の問題機制の二つの方向性を現していた。両者は直接互いを批判し合うことがなく、二つの方向性の相違が明確に整理され議論されることもなかった。日本における近代の超克の問題は、西洋近代そのものの超克へとシフトし、新たな伝統や思考を形成するには至らなかつたわけであり、その問題機制は現代においても問われるべきとする著者の最後の言葉はきわめて示唆的である。それは本書のテーマと方法とが、昭和一〇年代を中心としながらも、明治期から現代まで広く日本の近代が有する問題性を見通そうとする文学史的・思想的視座を獲得しているからであろう。

著者の高い問題意識とねばり強い考察に導かれて、読者は霧の中に隠されていた道の先がどこに通じていたかをまのあたり

にすることができ。しかし、それはまた新たな道との出会いでもある。たとえば、著者の言葉を借りれば〈アクロバット〉〈シフト〉〈横すべり〉という思想的現象である。保田が岡倉天心の「アジアは一なり」の発想と排外的な国学の思想を結びつけたことを〈アクロバットの〉と言う時、そこには思索上の飛躍がある。「文明開化の論理」を批判しながら中国の地に日本の風景を見出して感慨に耽ることの自己矛盾に気づかなかつたという指摘も、同種のものを含めて同じような飛躍の一種とみることができ。後世の目から見ると、その瞬間までは論理的な厳密さを保持しながら、唐突にそれが無化し、論理が飛躍するのである。そこにまた新たな道筋とその先を蔽う深い霧を感じざるを得ない。

特に保田によく見られる現象であるが、昭和一〇年代の知識人の一般的傾向としてもあったことは、〈日本的なるもの〉の問題機制そのものが〈シフト〉し〈横すべり〉したと指摘されていることからわかる。従って、現象学の判断中止や詩的直感ということだけで説明してしまうこともできない。しかし、それが思索上の行き詰まりに苦悩する知識人にとつて、麻薬的な魅力をもつこともまた容易に想像できるのである。同時代の知識人の多くが保田の言説に引き込まれていった理由の一端もそこにあるのではないかという気がしてならない。

その飛躍を保障しているのは何だろうか。保田の言説の中に手がかりを求めるとすれば、〈象徴〉という用語にあるように思われる。本書では「日本の橋」がモーリッツ・ガイガーの『現

象学的芸術論』の影響を受けていることが述べられているが、〈現象〉という用語が〈象徴〉に置き換えられているのである。この置き換えには重要な問題が潜んでいるのではないだろうか。ここで〈象徴〉は（一）において多を表す一即多、もしくは多即一の暗示的手法」と説明されているが、こうした〈象徴〉の中ではあらゆる客観的・分析的な認識が無化されてしまい、自他、主客、前後といった関係性は曖昧化し、論理は融解していく。しかしながら、少なくとも日本の近代文学の中で語られる〈象徴〉はまぎれもなく西洋近代から移入された概念なのである。その起源は昭和をはるかに遡る明治三〇年代の象徴詩移入にあり、象徴詩理解という点においては大正から昭和にかけ

て新たな展開があつたものの、当時においても一般的な文芸用語として用いられていたのである。（日本的なるもの）に関わりつつ、そこには昭和初年代から一〇年代という枠組みを超えた問題があるといつてよいだろう。

本書が取りあげ詳細な考察を展開した（日本的なるもの）という問題機制は、読者をさらなる考察へと誘う深みを有している。巻末の「昭和初年・一〇年代の（日本的なるもの）に関する主要文献一覧」はそれを十分にアシストしてくれるだろう。

二〇〇九年三月 花書院 三〇二頁 定価二八〇〇円

（中原中也記念館）